

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第109号



賢治、いずこに
「宮沢賢治展
ようこそイーハトーブの世界へ」
展示資料より
開覧室より・寄贈資料より

2	山折哲雄
3	教育普及事業より・館からの「案内」
4	追悼 野山嘉正氏 中丸宣明
5	追悼 石田千尋氏 三枝昂之
6	資料翻刻 津田青楓 赤木格堂宛書簡
7	館の日誌 利用のご案内
8	

開館三十周年記念企画展

「宮沢賢治展 ようこそイーハトーブの世界へ」開催

令和元年9月21日(土)～11月24日(日)

日本文学史の中で詩・童話に独自の世界を切り開き、現在も多くの愛読者を持つ宮沢賢治。賢治は故郷岩手を「イーハトーブ」と呼び、理想郷として作品に描いている。そこには、自身の住む地域や故郷への愛着とともに、すべての生命を尊び共存を目指すとする賢治の理想が映し出され、現代の私たちにも課題を投げかける普遍的な世界が創られている。

■企画展関連イベント(すべて参加無料)
○講演会
いずれも午後1時30分～3時
会場 研修室 定員150名

・9月21日(土)

長野まゆみ(作家)

「カムパネルラのスケッチ帖」

・10月5日(土)

赤坂憲雄(民俗学者・学習院大学教授)

「宮沢賢治への問い」

・10月12日(土)

栗原敦(実践女子大学名誉教授)

「宮沢賢治の文学的表現行為」

〈本誌に一切を肯定する〉ために」

○講演と演奏「賢治作品の奏でる音楽」

11月3日(日・祝) 午後1時30分～3時

講師 宮澤和樹

朗読・ピアノ演奏 宮澤やよい

宮沢賢治旧蔵のヴァイオリン演奏

宮澤香帆

会場 講堂 定員 500名

○対談「宮沢賢治 短歌・俳句の世界」

11月16日(土) 午後1時30分～3時

講師 石寒太(俳人)



宮沢賢治
写真提供 林風舎

ジ、当館受付にてお申し込みください。

対談

「太宰治・著書と資料をめぐって」 六月十五日(土)

特設展「太宰治 生誕110年」作家をめぐる物語」の関連イベントとして、安藤宏氏と川島幸希氏の対談を講堂で開催した。第一小説集『晩年』献呈本の識語や、『お伽草紙』『パンドラの匣』の初版と再版の異同など、太宰研究における著書の重要性を語っていただいた。終了後、川島氏のご厚意により、川島氏所蔵の『晩年』を含む太宰の初版本十七冊を研修室に展示した。受講者は、手に取って紙の手触りや活字の様子などを熱心に確かめていた。



安藤宏氏(左)と川島幸希氏

開館30周年記念講演会

林真理子「小説の力を信じて」

11月10日(日) 開催

開館三十周年を記念し、林真理子(作家 山梨市生まれ)の講演会を開催。会場は講堂、定員五百名、お電話、ホームページ

賢治、いふに

山梨県立文学館

ことしの六月、故笠原芳光氏を偲ぶ会に出るために神戸に行った。独立自営のキリスト者で、「森集会」なるものを五〇年にわたって主宰していた。その記念誌の一つに、吉本隆明氏の講演「宮沢賢治における宗教と文学」というエッセイが載っていた。

テーマは賢治における法華経信仰と文学、芸術の関係である。賢治はそれをどう考え、解決しようとしていたのか、ということだ。そして最後に、こんなことをいっている。一点にしばってというと、

法華経信仰とかキリスト教信仰といっても、賢治にとってはそこからはみ出していくもの、流れ出していくものがあり、そこから彼の文学や芸術がはじまるのだ、と。だから文学や芸術は仏教やキリスト教からはみ出すもの、いいかえれば非宗教の世界のもの、だから両者は砂と水のようなものだ、といっているに等しい。聖書の「ヨブ記」や法華経の「三車火宅」の比喻をもち出して説明しているけれども、結局それは水と油(砂)の関係で交わることがない。(「思想の森」1、一九九二年)。

その講演録が刊行されるちょうど前年

だったが、天沢退二郎氏が『謎解き・風の又三郎』(丸善ライブラリー)を出し、この賢治の作品の初期稿では「風野、又三郎」となっているのに、最終稿では「風の又三郎」になっている、それはなぜかという謎解きに挑んでいた。その詳細にふれる余裕はないけれども、その中にこんなことが書かれていて、なるほどと思ったことを覚えていいる。

宮沢賢治が亡くなったとき、一般にはほとんど無名でした。そして遺稿の大部分は、未整理の箇所の多い下書稿のままでした。弟の清六さんをはじめ、賢治作品を世に出すことに情熱をもちしていた人たちは、賢治の原稿を整理し、多少なりとも、いわゆる「お化粧」をして活字にせざるをえませんでした(略)

「風野又三郎」の場合は、たぶん、物語の本文の中では一度もこの表記がなくて、すべて「風の又三郎」になっていることが注意されたのでしょうか。それに、まだ賢治の人も作品も何も知らない世の一般読者や、子どもたちに、まず読んでもらうには、「風野」はカタすぎる。「風の又三郎」——これがいい、こ

れが魅力的だ、と考えられたのでしょうか。(同書、6〜7頁)

分らない話ではない。それどころか、目の前にある無名の宝を何とか世に出したい、という切実な気持ちも伝わってくる。そしてその背後からは、文学の香り

だけを宗教固有の岩盤から何とか救出しようとする意図すらが立ちのぼってくるようだ。宗教からはみ出るものに芸術の輝きを求めようとする、あの吉本隆明氏の気持ちもそこらにじみ出てきたのではないだろうか。

ただ、そんなことをあれこれ考えているうちに思い浮んだのが、賢治の最晩年に書かれた『最後の手帳』に出てくる断章「雨ニモ負ケズ」であった。とりわけ、

手帳原本に出てくる「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」を、「ヒデリ」と直して墨書した高村光太郎の問題である。それもあるいは、多くの人々に分かりやすくするため、また文学や芸術の香気を救い出すため、まことに自然な気持ちのままに改めようとした流れであったのかもしれない、そう思ったのである。

それからもう一つ。その「雨ニモマケズ」という断章の最後の一節が、「手帳」では、そのまま次の頁の全面を覆う「南無妙法蓮華経」の題目、つまり祈りの宗教的呪言に接続していたのに、それがそのあと世の中には切り離されて流布され、一般化してしまったということが、どうしても念頭に蘇ってくる。

『最後の手帳』の原本状況に照らすかぎり、「雨ニモマケズ」の詩的断章とこの題目本尊はけっして分断したり切断したりできる二つの別個の要素などではない、密接な連続状況のなかで書かれていることが、あまりにも明らかだからである。

「文学」から「宗教」を切り離そうとする、見えざる手の働きである。「宗教」からはみ出るものに美的な源泉を求めようとする隠された意図である、といっているだろう。そのことで賢治の文学そのものが、ギリギリの場面で悲鳴をあげていることに、われわれは知らぬ顔の半兵衛をきめこんできたのである。それでは、賢治の存在自体が無化され崩壊しかねないではないか。

「近代」の宿命が、そこまで追いつめられ、ついに底を割ってしまった、というほかはないのだろう。知られるように夏目漱石は、その執筆活動のはてに宗教(禅門)の「門」をくぐろうとしたけれども、ついにくぐることをしなかった。それは何も漱石だけの話ではなかった。この日本「近代」においては宗教という門はいつでも「鬼門」として、禁忌された開かずの「門」としてわれわれの前に立ちはだかつていたように思えてならないのである。

宮沢賢治は今、その「近代」の犠牲の祭壇に祀られたままなのである。

賢治、今、いずこに！

(宗教学者・評論家)

■開館三十周年記念企画展

「宮沢賢治展」

ようこそイーハトーブの世界へ」

展示資料より

宮沢賢治「雨ニモマケズ」手帳

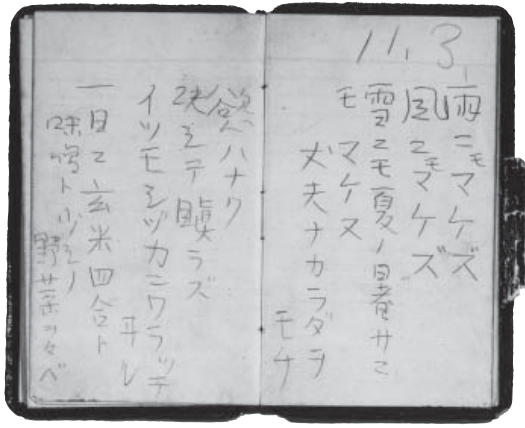
林風舎蔵

実物資料 期間限定公開

十一月二日(土)～十五日(金)

※期間外は精密複製を展示します。

この手帳は、賢治歿後、最初の全集を刊行するため遺稿を整理した際、賢治愛用のトランクのポケットから発見された。一九三一(昭和六)年十月上旬から、年末または翌年一月まで使用され、残存する賢治の手帳のうち、最も後のもの。左開きの手帳を右開きに使用している。



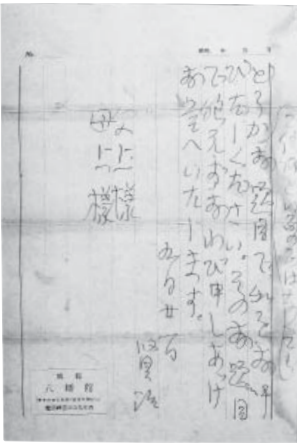
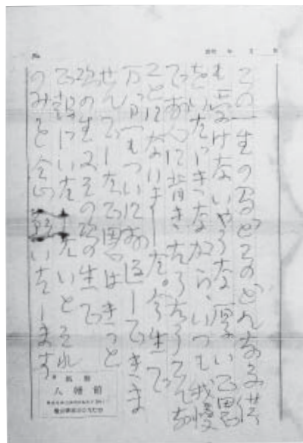
病床にあった賢治が、作品の下書きや信仰への思いなど、記している。賢治の作品としてよく知られる「雨ニモマケズ」が記されていることから、のちにこの名前と呼ばれるようになった。

宮沢賢治 父母宛の遺書

一九三一(昭和六)年九月二十一日

林風舎蔵

一九二八(昭和三)年七月、賢治は肺結核の診断を受け自宅で療養する日々を送る。一九三〇年の一月から四月にかけて徐々に体調が回復に向かい、東北砕石工場より合成肥料などの相談を受けるようになり、翌年一月、同工場で技師とし



て仕事をするようになった。

この遺書の書かれた前日、同工場の販路拡大のために賢治は上京し、神田駿河台の旅館八幡館に宿泊するが発熱。死を覚悟して父母と弟妹に宛てて遺書を書いた。そして、二年後の一九三三年九月二十一日に死去。歿後、前掲の「雨ニモマケズ」手帳とともにトランクのポケットから発見された。

宮沢賢治 保阪嘉内宛書簡

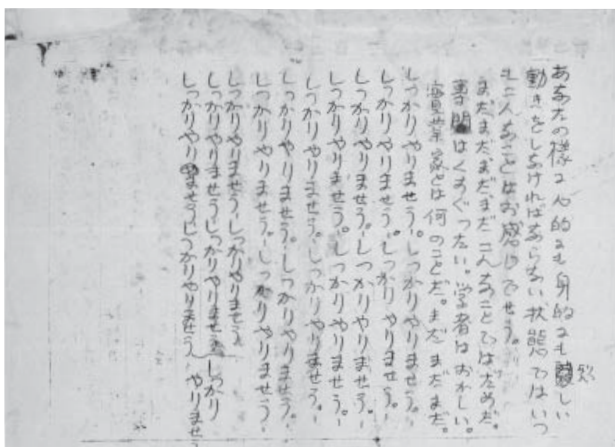
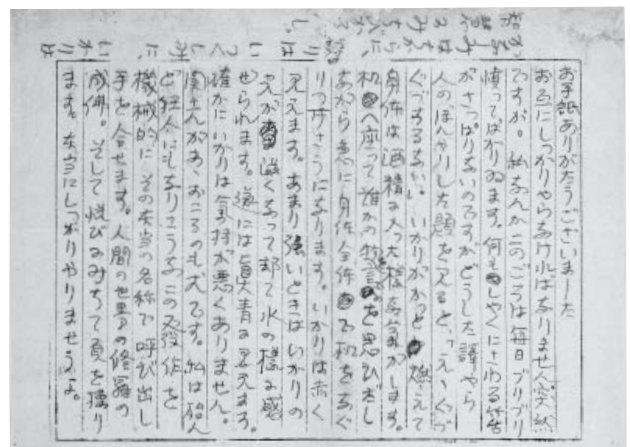
一九二〇(大正九)年

六月～七月(推定)

寄託資料

一九一八(大正七)年三月、賢治は盛岡高等農林学校を卒業し、同研究生となった。一九二〇年五月に研究生を修了し、その後、助教教授推薦の話もあったものの、学校への寄付が伴うことから、父親と相談のうえ辞退することとした。

保阪嘉内(一八九六～一九三三 山梨県韮崎市生まれ)は同校で一級下の友人で、在学中、同人雑誌「アザリア」を創刊した仲間の一人。書簡には、将来が見えないことへの不安やいらだちから、表面に「お互にしつかりやらなければなりません。」と綴り、裏面の末尾には、「しつかりやらませう。」が二十一回、繰り返し書かれている。



閲覧室より

開館三十周年記念

閲覧室資料紹介

「山と水に遊ぶ」を終えて

「山と水」と聞くと、心浮き立つ人も少なくないでしょう。多くの作家たちも「山と水」に惹かれ、その心を分かち合おうと作品を残しています。

そんな「山と水」をテーマに、当館閲覧室では、開館三十周年記念特設展「山と水の文学」にあわせ、「山と水に遊ぶ」と題した資料紹介を、七月十三日（土）から八月二十五日（日）まで行いました。

「山」のコーナーでは、「山」「富士山」「八ヶ岳」「南アルプス」など七つのテーマに分けて約五十点の資料を紹介しました。「百の頂に百の喜びあり」という言葉を残した深田久弥の代表作『日本百名山』や、現実に起こったナイロンザイル切断事件を取材して書いた井上靖の小説『氷壁』などの作品を、手に取って見ていただきました。

「山」で紹介した資料は、装丁や挿絵に趣向を凝らしたものが多く、文章だけでなく、目で見て楽しむことができました。例えば、新田次郎の『孤高の人』は、

表紙に美しくそびえ立つ槍ヶ岳の写真が使用されています。また、大町桂月の『山水めぐり』は、表紙絵に描かれた水の青と山の緑が鮮やかでした。

「水」のコーナーは、「水」「湖」「川」「温泉」という四つのテーマに分けて、約二十点の資料を紹介しました。

作者の浦安での生活を元に、べか船の行き交う漁師町・浦粕町の人々を描いた山本周五郎の『青べか物語』、笛吹川沿いに暮らす農民一家を描いた深沢七郎の『笛吹川』など、身近なものとして「水」が随所に出てくる作品をご紹介します。



また、展示期間が夏休みと重なったこともあり、「子供の本」コーナーを設け、作品についてのクイズを掲示し、大人から子供まで楽しんでいただける資料紹介を目指しました。このコーナーでは、子供たちだけでなく、懐かしい絵本をじっくりと読みふける大人の方もいらつしました。

この資料紹介をとおして、豊かな山と水に囲まれた山梨県にある当館を、もっと身近に感じていただけていたら幸いです。

（資料情報課 中島桂子）

「寄贈資料より」

（令和元年五月～七月）

○ 柏木鐵雄氏より高浜虚子「新蕎麦会選句稿」軸装など十四点。

○ 根岸千代子氏より山崎方代「ゆるり鎌倉 愛された方代さん晩年の跡」新聞切り抜き。

○ こまつかん氏より「日本現代詩人会 現代詩ゼミナール in 山梨」。パンフレット

○ 石井耕氏より『祖国の砂 日本無名詩集』を跡付ける「抜き刷り」。

○ 栗原敦氏より「銀河鉄道の夜」最終形の生成と「或る農学生の日誌」二「抜き刷り、図書一点、雑誌三点。

○ 前田良和氏より谷崎潤一郎文学碑パース他特殊資料八点、図書一点、雑誌二十点。

○ 横田幸子氏より飯田蛇笏「蚊の聲や」短冊など五点。

○ 望月美江子氏より佐佐木信綱の望月佐和子宛葉書二点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。（敬称略）

相澤 啓三	中村 吾郎
一條 宣好	秦 恒平
一瀬 公弘	花里 鬼童
宇田川 昭子	平松 伴子
大野 とくよ	広瀬 俊子
尾崎 左永子	古屋 久昭
角川 春樹	保坂 衣子
橘田 和樹	松本 徹
橘田 活子	溝口 克己
今野 寿美	三橋 透
関口 安義	森 義真
館野 豊	吉村 登

この他に団体の方々からも寄贈いただいております。

教育普及事業より

○夏休み自由研究プロジェクト

「山と水 オリジナルトートバッグをつくろう」

7月15日(月・祝)、消しゴムはんこを使って、オリジナルトートバッグを作るワークショップを開催した。たくさん



の消しゴムはんこに子ども達は、目を輝かせながらバッグ作りに励んでいた。それぞれ好みにより、山や水の世界を再現したバッグを完成させていた。

○夏のワークショップ

「山と水からいたたく色―草木で和紙葉書を染めよう―」

7月27日(土)、染織家の藤井繭子氏を講師に、草木で和紙葉書を染めるワークショップを開催した。

参加者は臭木と熊笹から染液を作り、思い思いのかたち



め上げていた。「草木染めが身近に感じられた」「自然の力強さを感じた」「普段と違う時の流れに癒やされた」などの声があがった。

○「あなたの心を鏡開き 2019

―太神楽の世界を体験しよう―

7月30日(火)、かがみもち(夫婦太神楽) 太神楽師 丸一仙三、仙花の両氏を迎え、江戸時代から続く伝統芸能を体験するワークショップを開催した。

参加者は、お手玉を使った「投げ傘回しなど」の太神楽芸を実際に体験した。「集中しながら、楽しい体験をすることができた」「元氣になった」などの声があがった。



館からのご案内

■教育普及事業

○名作映画鑑賞会

・10月14日(月・祝) 午後1時30分
「蒲田行進曲」

・11月9日(土) 午後1時30分
「砂の器」

会場 講堂 定員500名 無料

※申込不要

○朗読講演会

「タング―まほうをかけられた舌―」

12月14日(土) 午後2時

出演 オペラシアターこんにゃく座

会場 講堂 定員500名

入場無料

原作は安房直子の「まほうをかけた舌」(岩崎書店刊)。父親のレストランを継ぐことになった味音痴の少年と、味の妖精「タング」が繰り広げる物語の創作オペラです。

生の歌声とピアノ演奏にパフォーマンスを加えた「うたのステージ」では、「岩手軽便鉄道の一月」(宮沢賢治・詩/林光・曲)、「歩くうた」(谷川俊太郎・詩/林光・曲)などを上演します。

※要申込。電話または当館受付、ホームページにてお申し込みください。

■展示室

○第一・四室(展示室A) 展示替え

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第一室で期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

・秋の常設展

近代文学の名作4
山本周五郎「青べか物語」

8月27日(火)～10月14日(月・祝)
近代文学の名作5

山本周五郎「おごそかな渇き」

10月16日(水)～12月1日(日)

・冬の常設展

近代文学の名作6

深沢七郎「檀山節考」

12月3日(火)～1月26日(日)

近代文学の名作7

深沢七郎「笛吹川」

1月28日(火)～3月8日(日)

○第五室(展示室B)の展示替え

山梨県出身・ゆかりの文学者一〇四名を二期に分けて展示しています。

・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

10月5日(土)～3月8日(日)

※第五室は、9月3日(火)～10月4日(金)、11月26日(火)は休室します。

■閲覧室

○閲覧室資料紹介

・「探偵小説の時代」

2月7日(金)～4月5日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

・「徳永寿美子」(9月24日生まれ)

9月13日(金)～10月3日(木)

・「八木義徳」(10月21日生まれ)

10月18日(金)～11月7日(木)

・「石原八束」(11月20日生まれ)

11月15日(金)～12月5日(木)

・「檀一雄」(2月3日生まれ)

1月31日(金)～2月20日(木)

・「芥川龍之介」(3月1日生まれ)

2月28日(金)～3月19日(木)

○書庫見学

11月20日(水・県民の日)
午前11時と午後2時の2回

■追悼 野山嘉正氏

野山先生を悼む

中丸 宣明

二〇一九年五月二十九日、山梨県立文学館専門委員である野山嘉正先生が逝去された。享年八二歳。まだまだこれからも活躍をと願っていただけに、残念な気持ちで一杯である。先生とのご縁は、一九八六年、先生が山梨大学から東京大学にお移りになったあと、その後任として私が赴任することに始まった。山梨大への割愛願いが遅れたせいもあり、先生は四月、私はおくれて九月に、それぞれ着任することになった。四月、私はまだ院に籍があつたので、先生の許へ履修の許可（？）を戴きに赴いた。すると先生は「いまさら俺から単位を取ろうというのか？ワッハハ……」と仰った。俺と自称されたかどうかははっきりとは覚えていない。今から考えると先生に似つかわしくないようでもあるが、私のなかでは豪快なというか明るいというか、笑い声も「ガッハハ」だったと感じた想い出がある。しかしそんなお姿の裏に、繊細でシャイな、暖かい気配りをされる先生がいらっしゃることは、すぐに理解できた。私も山梨大学赴任当時から、指導を受けた三好行雄先生が文学館の館長をなさっていたこともあり、文学館のお手伝いを

させていただいたが、そこで接する野山先生のお仕事ぶりはまさに精力的かつ誠実であつた。

先生は一九八〇年発足の「文学館構想策定委員会」の委員として文学館の建設・運営に早くから関わってきた。その折りのご活躍について私は知るよしもないが、企画展「書簡の文学 手紙にみる作家の素顔」（一九九〇年）、「樋口一葉の世界」（同）、「旅の文学 山梨の自然と人」（一九九一年）、「生誕百年記念 芥川龍之介展」（同）、「与謝野晶子と「明星」（一九九二年）、「飯田蛇笏展 没後三十年」（一九九二年）、「現代の女性作家」（一九九三年）の編集委員、また講座「子規から蛇笏へ」（一九九二年）やシンポジウム「芥川龍之介資料集を読む」（一九九四年）の講師などのお仕事からは先生の学識と気配りが十分に感じられた。また『芥川龍之介資料集』（一九九三年）の編集などを通じ、先生の文学資料に対する敬意とその利用・公開に関する倫理に対する配慮に、私は多く学ばせていただいた。

東京大学退官前後から、体調を崩されることも多く、ご苦勞もあつたかと思う。今はただ「お疲れ様でした。どうぞ安らかに」と、申し上げるのみである。合掌。

（法政大学教授）

■追悼 石田千尋氏

ご逝去を悼む

三枝 昂之

石田千尋先生には、二〇一六（平成二十八）年度末より、文学館専門委員に就任いただき、館の事業について貴重な意見をいただいていた。

徳島出身、東京在住の先生と当館とのおつきあいは、二十年前にさかのぼり、当時山梨英和短期大学の助教授でいらした一九九九年から、教授になられた二〇〇〇年にかけての二年間に年八回の講座の講師を務めていただいた。一年目は「日本神話のヒーロー・ヒロインたち――『古事記』『日本書紀』の世界」、二年目は「万葉人のこころを読む―奈良朝以前の万葉歌の世界」。専門の上代文学のテーマであつたが、確かな学術研究に裏打ちされながら、一般聴講者の関心へ配慮した語り口で、古典文学の面白さをわかりやすく読み解いたと評判だった。

今年三月十四日に文学館で開催した専門委員会にも出席いただいた。少しお疲れの様子のように見受けられたが、いつもの柔らかな物腰で、館の事業についての温かい励ましの言葉をかけていただいた。それから四ヶ月経たない内にお亡くなりになるとは思われなかった。

近年は、山梨県の富士山総合学術調査研究委員、文学部会長を務め、文学の面から富士山の文化遺産としての価値を明

らかにしていく仕事にも尽力されたと聞いている。さらに二〇一七年、甲州市ケカチ遺跡出土の和歌刻書土器の読解研究に加わられるなど、山梨の古典研究に欠くことの出来ない存在感を示された。

甲州市で行われた「古代史しんぼじうむ『和歌刻書土器の発見』」の報告書に石田先生の「ケカチ遺跡刻書土器の和歌」が載っている。その要旨を通して、研究者としての先生の一面を紹介したい。

行頭・字間を揃えた仮名列は有意的統辞的な構文でしかも三十一文字、こうした特徴から文書は和歌であるとみてまちがいない。まずこう押さえている。もつとも大切な基礎的確認だろう。

そして「われにより／おもひくるらん／しけいと／あはすやみなは／ふくるはかりそ」の判読と語釈、現代語訳だが、細やかに参考例を示しながらのその見解は実にクリヤーで印象に残る。「各句に縁語を散りばめて構成された当該刻書と歌において、『しけいと』が一首の発想の中心に置かれている背景」に平安時代前半の甲斐国における蚕糸織物生産を見ている点も興味深い。

広く外に開かれた研究を心がける石田先生の姿勢がよく表れた発表で、改めてその早過ぎるご逝去が惜しまれる。

（当館館長）

野山嘉正氏、石田千尋氏は県立文学館専門委員。野山氏は二〇一九年五月二十九日、石田氏は同年七月七日に逝去されました。

資料翻刻

当館が所蔵する津田青楓の赤木格堂宛書簡二通を翻刻する。

津田青楓(一八八〇～一九七八 京都府生まれ)は本名亀治郎、旧姓西川。華道家で去風流家元の西川一葉の息子として生まれた。関西美術院に学び、一九〇七(明治四十)年、フランスに留学。帰朝後、夏目漱石と知り合い、漱石に油絵を指導した。漱石の『道草』(一九一五年十月 岩波書店)をはじめ、多くの図書の装幀を手がけている。

赤木格堂(一八七九～一九四八 岡山県生まれ)は本名亀一。東京専門学校(現在の早稲田大学)在学中に正岡子規に師事し、「日本」の俳句欄で活躍した。子規歿後は俳壇や歌壇から遠ざかり、一九〇八(明治四十一年)年から約三年間、ドイツ、フランスに留学、帰国後、「山陽新報」主筆などを通して政治を論じた。格堂は、一九一三(大正二)年二月、青年向けの政論雑誌「青年日本」を創刊、主宰。論客には福本日南、藤井甚太郎らの名が見られ、文芸欄では松根東洋城が俳句の選を担当した。一九一七(大正六)年、衆議院議員に当選、故郷小串村の村長(現在の岡山市)も務めた。

津田青楓 赤木格堂宛書簡(封書)

一九一三(大正二)年九月十三日

拝啓

久しく御無さいたし申候

昨日は甚だ、うまいもの御送り被下有難候

先日一寸夏目さんへ行つた帰途御伺ひ申候へども未

た御帰京なきとの事にて残念いたし申候

小生茲十日程前より国より母来たり見物案内役に毎

日出歩るき居り、為め雑賀君と度々かけちがい失礼

致し居候

一草亭への事、早速手紙を出し申候未だ何とも返事

なく候故返事のあり次第御通知申上候

小生の随筆(日記より)は多少ふやせる見込有難候此月ハ秋の展覧会の為めに大井に多忙な月なれど右様の事にて出歩るき一口に何も出来ず氣ばかりあせり居候

小供ハ又女かとあきらめ居りしが偶然にも男が生れて嬉しく候

夏目さんに命名して貰い(安丸)とつけ候(安丸は)ヤスクウマレルに御座候

先は右用事迄

九月十三日

早々

赤木格堂様

雑誌の用件雑賀君へ御伝へ被下度候

〈受〉早稲田南町四十八 青年日本社

赤木格堂様

〈発〉小石川高田老松町四十三

津田青楓

〈註〉十八センチ×一三九・四センチの巻紙に墨筆。封筒に参銭切手一枚貼付。消印は「小石川2.9.13后4-5」「牛込2.9.13后6-7」。

「夏目さん」は夏目漱石のこと。漱石の住居は青年日本社に近い早稲田南町七だった。「雑賀君」は「青年日本」の編集発行人雑賀博愛(一八九〇～一九四六)。「一草亭」は青楓の兄で去風流七世家元の西川一草亭(一八七八～一九三八)。一九一三(大正二)年十月発行の「青年日本」第一巻第九号に、青楓の「絵筆を洗つて」「フロモンビールの日記」、一草亭の「文展論」を掲載されている。青楓の子どもの名前について漱石は、一九一三年八月五日付の青楓宛書簡に「安丸」の他、八月三日生まれなので「八三」、高田老松町で生まれたので「高松」などの候補名を記している。

津田青楓 赤木格堂宛書簡(封書)

一九一三(大正二)年十月十五日

拝啓

昨日は失礼いたしました

久し振りでいろ／＼の愚痴を聞かせて御迷惑でしたろうが御かげで何だ氣がせい／＼しました、別紙にてカット四五枚送ります、(カットハ急ぐと思つた故)それから若し近い内に一草亭が来たらば二人にて文展批評を問答体を書いて見様かと思ひます、然し果してメ切に間に合ふ様に一草亭が上京するかどうかと思ひます。

昨日は突然御客が来たもので何だかいろ／＼云ひのこした様な氣がして残念でした、

明日午後夏目先生を誘ひ出して文展を見に行くつもりです、

先は右用事迄

早々

以上 青楓

十月十五日夜 格堂詞兄

〈受〉牛込早稲田南町四十八 青年日本社

赤木格堂様

〈発〉小石川高田老松町四十三

津田青楓

十五日夜

〈註〉十七・八センチ×一〇五・二センチの巻紙に墨筆。封筒に参銭切手一枚貼付。消印は「小石川2.10.15后10-12」「牛込2.10.16前0-7」。「青年日本」には青楓のサイン「S.T.」が記された表紙絵やカットが多く見られる。一九一三年十月十五日から十一月十八日まで上野竹の台陳列館で第七回文展が開催された。同年十一月発行の「青年日本」第一巻第十号に「文展鳥瞰図」の一作として、一草亭の「作品に対して」が掲載されている。

©Rieko Takahashi 2019/JAA1900166

(学芸課 保坂雅子)

館 の 日 誌

- 6・4（火）夏の常設展 期間限定公開 近代文学の名作3
芥川龍之介「或阿呆の一生」（～8・25）
- 6・14（金）閲覧室 食育推進全国大会 in やまなし関連資料
紹介「文学者の食卓」（～7・15）
- 6・15（土）対談「太宰治・著書と資料をめぐって」
講師 安藤宏（東京大学教授）、川島幸希（秀明
大学学長）
- 6・19（水）教師のための学習会
- 6・20（木）年間文学講座2
「田山花袋『蒲団』—『私』を描くまでの苦闘」
講師 大木志門（山梨大学准教授）
- 6・22（土）名作映画鑑賞会「狂った果実」
- 7・7（日）第3回読書会
- 7・12（金）年間文学講座1
「平安時代の文学作品にみる富士山」
講師 長瀬由美（都留文科大学教授）
- 7・13（土）特設展「山と水の文学」（～8・25）
閲覧室資料紹介「山と水に遊ぶ」（～8・25）
- 7・14（日）学芸員実習（～7・20）
- 7・15（月・祝）夏休み自由研究プロジェクト
「山と水 オリジナルトートバッグをつくろう」
- 7・18（木）年間文学講座2
「志賀直哉『城の崎にて』—透明な文体の成立」
講師 大木志門（山梨大学准教授）
- 7・20（土）名作映画鑑賞会「フランダースの犬」
- 7・27（土）夏のワークショップ「山と水からいただく色
—草木で和紙葉書を染めよう」
講師 藤井蘭子（染織家）
- 7・28（日）年間文学講座3「山の描写いろいろ」
講師 高室有子（当館学芸員）
- 7・30（火）夏のワークショップ「あなたの心を鏡開き 2019
—太神楽の世界を体験しよう」
講師 かがみもち（夫婦太神楽）太神楽師 丸一
仙三、丸一仙花
ジュニアインターシップ受け入れ（～8・3）
- 8・9（金）年間文学講座1「富士山を詠む和歌—平安時代」
講師 佐藤明浩（都留文科大学教授）
- 8・15（木）年間文学講座2
「徳田秋聲『あらくれ』—野生の女性の一代記」
講師 大木志門（山梨大学准教授）
- 8・11（日）名作映画鑑賞会「トムソーヤの冒険」
第4回読書会
- 8・27（火）秋の常設展 期間限定公開 近代文学の名作4
山本周五郎「青べか物語」（～10・14）
- 9・7（土）文学創作教室
講師 三枝昂之（当館館長・歌人）
- 9・8（日）第5回読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9：00～17：00（入室は16：30まで）
- 閲覧室・研究室 9：00～19：00（土・日・祝日は18：00
まで）
- 講 堂・研修室 9：00～21：00
- 茶 室 9：00～21：00（準備・片付けの時間も含まれます）
- ミュージアムショップ 9：30～16：20

■休館日等（9～3月）

- 9月2・9・17・24・30日
- 10月7・15・21・28日
- 11月5・11・18・25日
- 12月2・9・16・23日
- 1月6・27日
- 2月3・10・17・25日
- 3月2・9・16・23・30日
- 年末年始は12月26日（木）～1月1日（水）まで休館します。
また、1月14日（火）～1月21日（火）は館内整備等のた
め休館します。

■展示室観覧料 9月30日まで

	常設展			企画展		常設展と 企画展の セット券
	個人	団体 (20名以上)	美術館 との 共通券	個人	団体	
一 般	320円	250円	670円	600円	480円	730円
大学生	210円	170円	340円	400円	320円	490円

■展示室観覧料 10月1日より

	常設展			企画展		常設展と 企画展の セット券
	個人	団体 (20名以上)	美術館 との 共通券	個人	団体	
一 般	330円	260円	680円	600円	480円	740円
大学生	220円	170円	340円	400円	320円	490円

※65歳以上の方（企画展は県内在住者のみ）、障害者手帳をご
持参の方およびその介護をされる方、並びに高校生以下の児
童・生徒の観覧料は無料です。

■施設利用のお申し込みについて

- 講堂・研修室・研究室・茶室の申込みは、使用しようとする
日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込みの
際、ご説明いたします。

山梨県立文学館 館報 第109号
令和元年9月10日発行

編集兼
発行人 三 枝 昂 之

発行所 山 梨 県 立 文 学 館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX 055(226)9032

<https://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>

※紙面・記事・写真の無断転載・転用はお断り
します。